



田辺町埋蔵文化財調査報告書第16集

京都府田辺町

飯岡遺跡第4次発掘調査概報

1993

田辺町教育委員会

飯岡遺跡第4次発掘調査概報



飯岡丘陵

1993

田辺町教育委員会



S B09・S B08 (北から)

序

田辺町は、西側は生駒山系に連なる京阪奈丘陵の山並みが、東側は太古より流れる木津川によって形成された平野部が広がるという地形です。

ところが、町の中央部に木津川に接してひとつの丘があります。

この丘が飯岡で、柿本人麻呂によって「いのおか昨山」と万葉集にも詠まれたところです。

今回の報告は、この昨山一帯に広がる飯岡遺跡の概要報告で、天理教大東分教会の神殿建築にともなう調査のものです。

飯岡は古くから古墳の山として知られるほど多くの古墳があるところですが、それよりも古く弥生時代の集落があったところとしても知られるようになってきました。

今回の調査でも、弥生時代の住居の跡などがみつかり、わたしたちが想像していた以上に大きな集落があったことがわかつてきました。

最後になりましたが、調査にあたって、天理教大東分教会・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことをお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解たまわりますようお願い申しあげます。

平成5年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉山勝平

例　言

1. 本書は、田辺町教育委員会が行った京都府綴喜郡田辺町大字飯岡小字南原10番地
ほかに所在する飯岡遺跡の第4次発掘調査の概要報告である。
2. 調査は宗教法人天理教大東分教会（代表役員 小倉昭子）の依頼を受け、平成4年度事業として実施した。
3. 現地調査は平成4年5月15日から7月6日に終了した。
4. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体……田辺町教育委員会

調査責任者……田辺町教育委員会　教育長 吉山勝平

調査指導……京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館・田辺町文化財保護委員会

調査担当者……田辺町教育委員会　社会教育課 鷹野一太郎

調査事務局……田辺町教育委員会　教育次長 中川勝之

　　社会教育課 課長 奥西安己

　　課長補佐 河村信行

　　社会教育係長 北村茂

　　主查 西川加代子

調査参加者……岩本貴・池田吉弘・上村直樹・那須有紀子

植西美津子・原クニ江・吉本ふかみ

5. 調査を実施するについて、大東分教会をはじめ株式会社竹中土木大阪本店作業所所長 矢野清和、株式会社森下組 谷車斎、株式会社共建産業 岡勝之、田辺町シルバー人材センターの会員の皆さん、兎本久美、松村憲生、西川英弘の各氏には多大なるご協力を賜った。記して感謝します。

6. 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々よりご教示を得た。記して感謝の意とします。〔順不同・敬称略〕

長谷川達（京都府教育委員会）、高橋美久二（京都府立山城郷土資料館）、片岡肇・南博史・山田邦和（京都文化博物館）、中島正（山城町教育委員会）、松村茂（田辺町東）

7. 調査中に木田清次氏（井手町）、松村茂氏から今回の調査区に西接する場所からみつかった土器類の寄贈を受け、一部を図示することができた。お礼申しあげます。

8. 本書の執筆・編集は鷹野が行った。また校正等にあたり中井英策氏の協力を得た。

本文目次

1	はじめに	1
2	位置と過去の調査	2
3	調査経過	6
4	調査の概要	9
(1)	遺構	9
(2)	遺物	12
5	まとめ	18

挿図目次

巻頭 SB09・SB08（北から）

第1図	調査地位置図	1
第2図	飯岡丘陵全景（南から）	2
第3図	飯岡丘陵地形図	3
第4図	ゴロゴロ山古墳・薬師山古墳（南から）	4
第5図	飯岡遺跡第3次調査・竪穴住居跡	5
第6図	調査前全景（北西から）	6
第7図	調査前地形図	7
第8図	調査前近景（北から）	8
第9図	作業風景（南から）	9
第10図	SB08北東部土器集中部分（北東から）	9
第11図	トレンチ平面図	10
第12図	方形周溝墓SX01平面図	11
第13図	作業風景（北から）	12
第14図	作業風景（南から）	12
第15図	竪穴住居跡SB08・SB09平面図	13
第16図	トレンチ全景（拡張前）（南から）	14

第17図 調査地全景（北から）	15
第18図 S B08北東部土器集中部分（北から）	15
第19図 トレンチ北半部（南から）	16
第20図 S B09・S B08（北から）	17
第21図 S B08・S K06（東から）	18
第22図 トレンチ西壁土層断面図	19
第23図 弥生土器実測図（1）	20
第24図 弥生土器実測図（2）	21
第25図 弥生土器実測図（3）	22
第26図 石器実測図	23

1 はじめに

飯岡遺跡は、京都府綴喜郡田辺町大字飯岡に位置する、弥生時代後期を中心とする高地性集落として知られ、これまでに弥生時代後期の竪穴住居跡、方形周溝墓などがみつかっている。

天理教大東分教会では、田辺町大字飯岡小字南原10番地ほかに神殿の新築を計画された。計画地は、飯岡丘陵の南東部で飯岡遺跡に含まれ、かつては金泥山古墳があったとされる場所であるが、過去に土取りが行われ、資材置き場等として利用されていた所であった。しかし、神殿への進入路を計画している部分は、旧地形が残っているものと判断されたため、その部分での発掘調査が必要である旨伝えた。

その後、平成3年8月に当委員会に対し発掘調査の依頼があった。

現地調査は平成4年5月15日より開始し、7月6日に終了した。

なお、大東分教会をはじめ工事関係者の方々、ご指導・ご協力くださった皆さま、職場の皆さまそして調査に従事された諸氏、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位置図 ($S = 1 : 20,000$)

2 位置と過去の調査

田辺町は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央、伊賀の山中に源を発する木津川の左岸に位置する。町の西部は生駒山系に連なる京阪奈丘陵地帯を界定して大阪府・奈良県と接し、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い町である。

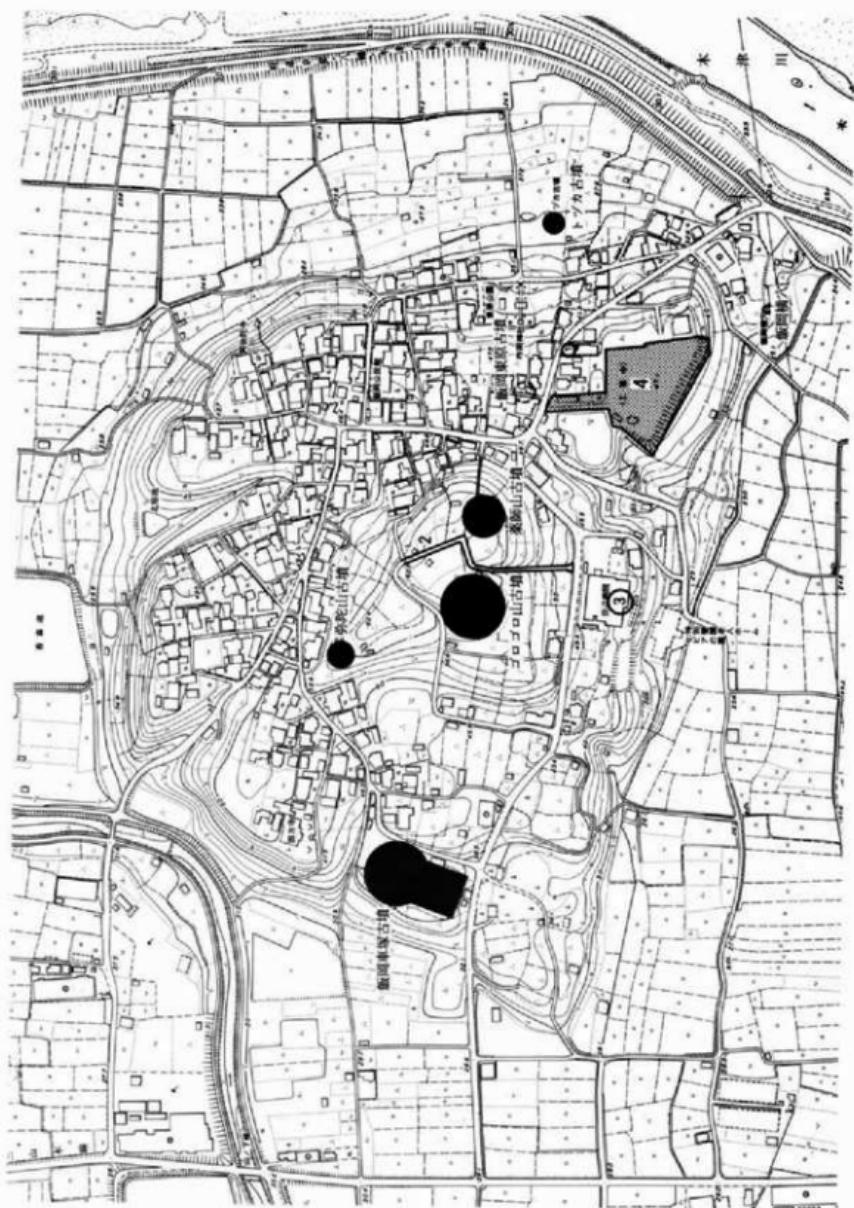
飯岡遺跡は田辺町東部の飯岡丘陵のほぼ全域にわたる遺跡である。柿本人麻呂に「^{いわま}昨山」と詠まれた飯岡丘陵は、木津川に接して存在する周囲約2kmあまりの独立丘陵である。南山城平野の中央に位置しているため、頂部からの眺望は絶景である。丘陵の最高所は標高67.5mで、南側の水田との比高は約40mを測る。

古くから古墳の山として知られ、前方後円墳飯岡車塚古墳をはじめ、大円墳であるゴロゴロ山古墳、弥陀山古墳・薬師山古墳・トヅカ古墳などの円墳、主体部がみつかった飯岡東原古墳、飯岡横穴などが存在する。これら以外にも古塚、馬塚、福塚、狐塚、經塚などの古墳があったことが知られている。

飯岡車塚古墳は、丘陵西端に築かれた南々西に前方部を向けた前方後円墳である。全長



第2図 飯岡丘陵 全景（南から）



第3図 飯岡丘陵地形図 ($S = 1 : 5000$ 、左が北)

数字は調査次数

約90m、後円部径約60m、前方部幅約42mを測り、葺石・埴輪ともに存在する。特に昭和51（1976）年に行われた、古墳の東側道路拡張工事にともなう発掘調査で、墳丘最下段の葺石とその外側を巡る楕円筒の埴輪列がみつかった。明治35（1905）年に後円部が掘り起こされ、短い竪穴式石室がみつかっている。副葬品には、勾玉・管玉・小玉の玉類、石劍・車輪石・鍔形石の腕飾類、刀劍片などが多量にあった。築造時期については、墳形、主体部、石製品の豊富さ、埴輪の特徴などから古墳時代前中期（4世紀末頃）と考えられる。

丘陵頂部には、弥陀山・ゴロゴロ山・薬師山の3つの円墳が所在する。いずれも古墳の裾部を丘陵斜面に繞かせるように築いており、視覚的効果を十分とりいれている。

弥陀山古墳は、北の頂部にある径約25m、高さ約4mの円墳である。明治初期に盗掘をうけたらしいが、詳細は不明である。

ゴロゴロ山古墳は、西の頂部にある径約60m、高さ約9mを測る山城地域でも最大級の円墳である。墳頂部には径約20mの平坦部をもち、葺石が存在する。墳丘北東部には一部堀がみられる。

薬師山古墳は、東の頂きにある径約38m、高さ約6mの円墳で、現在墳頂部に薬師堂が



第4図 ゴロゴロ山古墳・薬師山古墳（南から）

まつられている。

トヅカ古墳は、丘陵東裾に位置する径約20m、高さ約3.5mの円墳で、葺石・埴輪とともに存在する。明治7(1874)年、主体部の堅穴式石室が発掘され、鏡3面、玉類多数、鹿角製装具付刀剣、鉄地金銅装の馬具(鏡板・杏葉・鞍金具など)がみつかっている。築造年代は、古墳時代中期後半(5世紀後半)と考えられる。

飯岡東原古墳は、薬師山古墳とトヅカ古墳のほぼ中間のゆるやかな傾斜面、今回の調査地の北側に存在する。昭和53(1978)年に木棺直葬の主体部が不時発見され、急速調査されたものである。墳丘等については不明で、棺内外から須恵器・土師器・鉄製刀子がみつかっている。築造年代は、6世紀前半とされる。

飯岡横穴は、丘陵東南端にあり、花崗岩を掘削して築かれた横穴である。古くから開口していたが、昭和53(1978)年に横穴内部と周辺部の発掘調査が行われ、横穴の形態、規模などが明らかにされた。ほぼ南に開口し、羽子板形の平面形で、かまぼこ形の立面形態である。6世紀後半から末頃の築造と考えられ、10世紀には再利用が認められる。

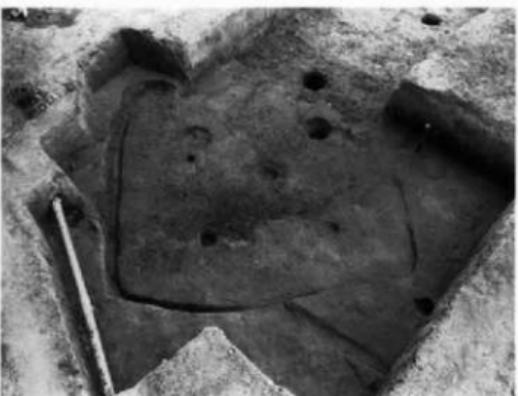
これらの古墳は、木津川の水運と深いかかわりのあった一族のものとみられる。

飯岡遺跡については、特に丘陵の南傾斜面を中心とする一帯で、弥生時代の遺物が広範囲にみられる。今回を含めて4回の発掘調査が行われている。

昭和34(1959)年、今回の調査地の東側で後期の堅穴住居跡が1棟みつかった。この調査は、崖面に住居跡の断面が露呈していることが契機となり、古代学研究会と田辺郷土史会が共催し、同志社大学の学生諸氏が参加して行ったものである。住居跡は周溝と床面の一部が残っていただけであったが、直径約8mの円形の住居跡と考えられている。(第1次調査とする。)

飯岡東原古墳調査時には、主体部の下層から深さ1m以上の後期の溝状遺構がみついている。

昭和57(1982)年の薬師山古墳北西側で行った農道建設とともになう調査で、後期の方



第5図 飯岡遺跡第3次調査・堅穴住居跡

形周溝墓の一部とみられる溝が2本、それらをとりまくような溝と柵列がみつかった（第2次調査）。

昭和60（1985）年には、田辺病院増築にともなう調査で、これも後期の竪穴住居跡1棟がみつかった。これは、一部流失していたが、 $4.5m \times 4.8m$ の方形のもので、周溝・主柱穴4・炉跡が存在した（第3次調査）。

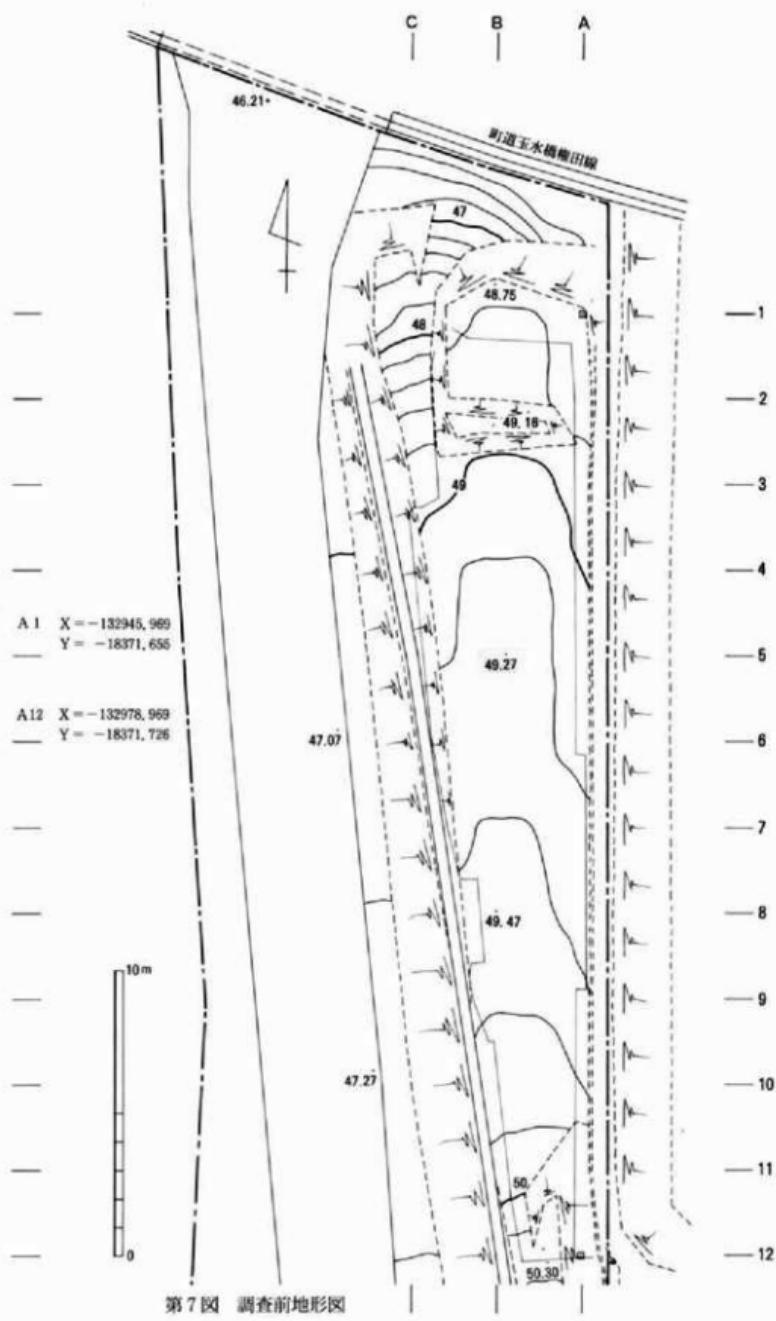
以上のような発掘調査の成果により、飯岡遺跡は丘陵南傾斜部分に住居が、丘陵頂部は方形周溝墓群が営まれていた弥生時代後期（V様式）の高地性集落であることが判明してきた。

3 調査経過

今回調査対象地となったのは、飯岡丘陵の南東部のかつては尾根状に小高くなっていた部分であるが、過去に土取りが行われ、広い平坦地となっていた所である。この部分では基盤層である岩盤が各所でみられ、完全に削平されているとみられた。ところが、町道玉水橋権田線からこの削平地に至る延長約40mの通路部分の東側は、高く残っており、南か



第6図 調査前全景（北西から）



第7図 調査前地形図



第8図 調査前近景（北から）

ら北に向けて傾斜しているものの、これが旧地形であるとみられた。また、調査対象地の東側は古くから民家及び庭になっており、やはり削平を受けている。この削平の際、多くの土器片がみつかったらしいことが伝えられている。この土壌状に残っている部分を通路部分と同じ高さまで削平し、進入路、駐車場を設けるという計画であったため、この高く残っている部分については発掘調査することとし、他の部分については工事にあわせ適時立会調査を行うこととなった。

工事は、神殿建設計画地の南側・西側の擁壁積み替え工事から開始された。このため、平成4年1～2月、工事の工程にあわせ3回の立会調査を行った。

発掘調査は旧地形と判断された所に幅3～6m、長さ36mの調査区を設け平成4年5月15日から開始した。

まず、表土層を機械で除去し、その後人力で掘り下げた。調査区中央で方形周溝墓の一部とみられる溝、北半でその溝と重複した竪穴住居跡などが多く弥生時代後期の土器等とともにみつかり、一部分を通路側崖まで拡張し調査を行った。この間、平成4年6月19日に報道関係者への成果発表、6月20日に一般を対象とした現地説明会を行った。

4 調査概要

調査地は北に低く南側が高くなつたゆるやかな傾斜地である。調査地の南側は、現在削平されているが、地元の人の話によると、小高くなつた丘陵状であったらしい。つまり、



第9図 作業風景（南から）

現在調査地の北側にある町道は、かつては、谷地であったことになる。

層位は、南側では表土下すぐい地山である赤褐色粘質土層がみられる。北側では、表土層以下に明黄灰褐色粘質土・暗茶褐色土がみられ地山層に達する。遺構の多くは、この地山面でみつかった。遺構面の標高は、南端部で49.60m、中央部で48.80m、北端部で48.10mである。

（1）遺構

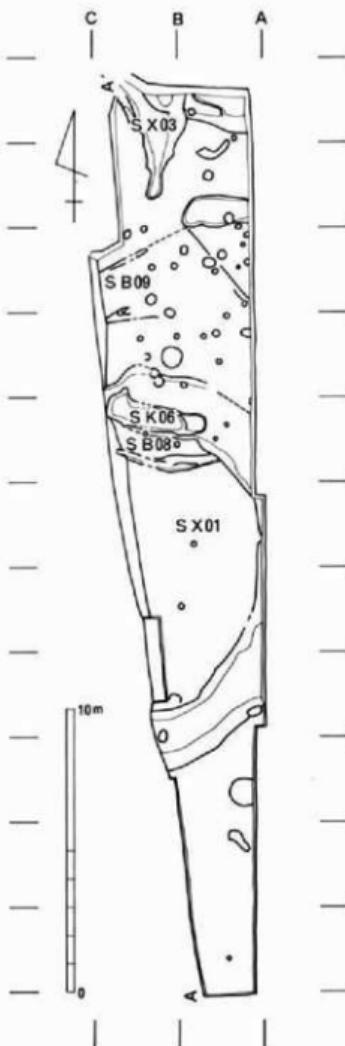
今回の調査でみつかった遺構には、方形周溝墓1基、竪穴住居跡2棟、土坑、ピットなどがあり、ほとんどのものは遺構内からみつかった土器より、弥生時代後期に属するものである。これらの多くは、調査区の北半部で重なり合っ



第10図 S B 08北東部土器集中部分（北東から）

てみつかったものであり、また調査区外に続いていたものが大半で、全体がわかるものはない。

以下、主な遺構について概略説明する。



第11図 トレンチ平面図

方形周溝墓 S X01

調査区中央で北辺・東辺の一部と南東コーナー部分がみつかったものである。他の部分は調査区外に続いていたものとみられる。ほぼ正方形とすると溝心々で一辺約12mの規模に復元される。幅約2m、深さ0.4mの溝に囲まれている。北辺は西側の崖付近で、急にすぼまりをみせ、溝底も上がるため、すぐ西側で途切れていたとも考えられる。溝の断面は、ほぼ逆台形である。周溝の南東コーナー部分の底中央で、中に炭を多量に含んだピットがみつかった。大きさは径0.35～0.4m、深さ0.2mである。主体部はみつからなかった。

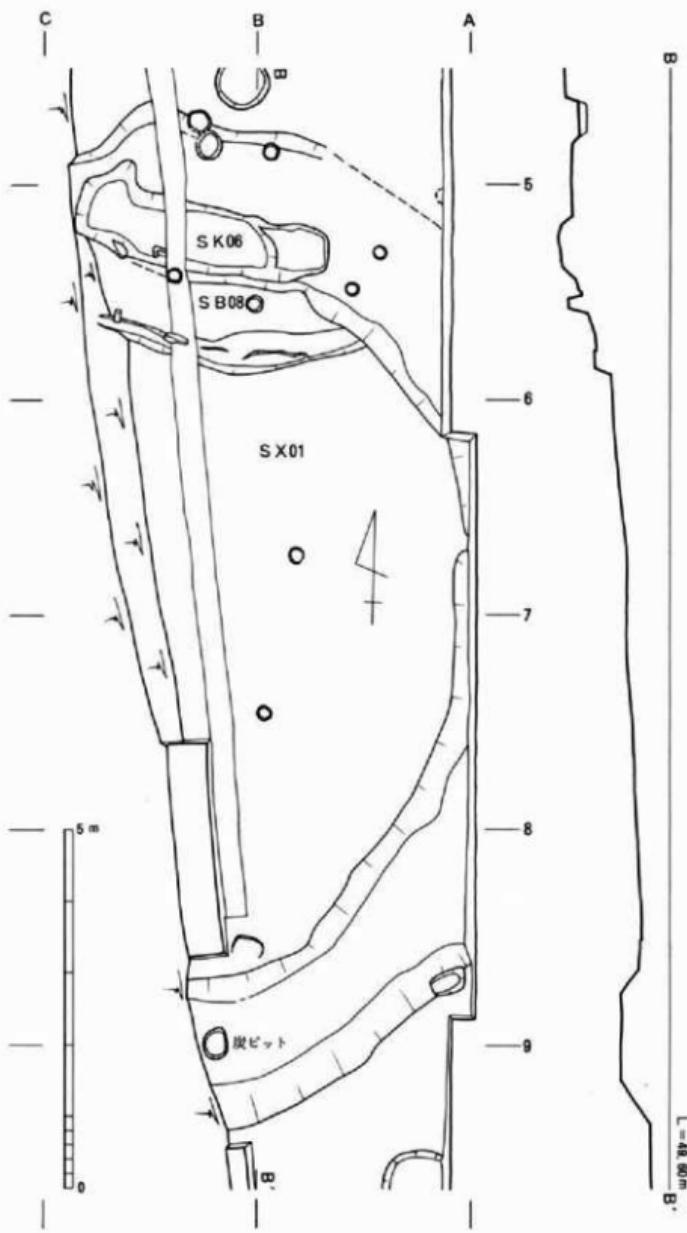
この周溝墓は北辺部で竪穴住居跡 S B08・土坑 S K06と重なっており S B08を切り、S K06に切られる。

竪穴住居跡 S B09

調査区北部でみつかった竪穴住居跡。北東辺・北西辺の一部が周壁溝の一部とともにみつかった。北東辺で3.5m分、北西辺2m分を確認した。削平を受けており、深さは数cmほどである。2辺でできる北コーナーは角度が105度であり、平面形が5角形のような多角形の住居もしくは方形の住居の重複が考えられるが前者の可能性が高い。

竪穴住居跡 S B08

調査区中央北寄りで北西側のごく一部と南側の弧状部分がみつかった円形の竪穴住居跡。



第12図 方形周溝基 S X01平面図



第13図 作業風景（北から）



第14図 作業風景（南から）

m、深さ0.65mを測る。壁は直線的にたちあがるが、床面は凹凸が著しい。埋土より土器片等がみつかっている。

谷状S X03

調査区北端でみつかった小規模の谷地形。水の流れによって形成されたものとみられる。土器片等がみつかった。

（2）遺 物

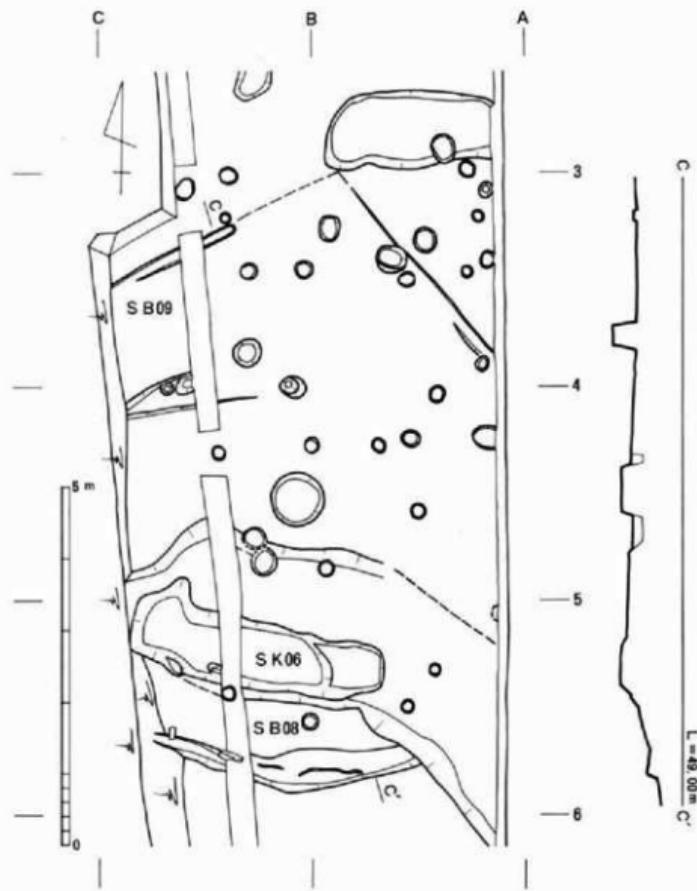
1. 弥生土器（第23図～第25図）

狭い調査区域であったが、竪穴住居跡S B08への一括投棄の状況を中心に多くの弥生土

直径6.5m程度に復元される。S B09が削平され、暗茶褐色土が堆積した後に掘りこまれたもので、方形周溝墓S X01に切られる。南側には浅い周壁溝が巡る。南側の壁の内側約1m付近に壁に沿うように5ヶ所の柱穴を確認した。柱穴の間は1.2～1.8mを測る。床面の中央北寄りで円形の土坑1基をみつけた。直径0.75m、深さ0.3mを測るもので、住居にともなうものとみられる。住居の埋土の北東部分から大量の土器片等がみつかった。完形になるものはないが、一括投棄されたような状況である。

土坑SK06

方形周溝墓S X01北辺溝が埋まった後に掘りこまれたもの。東西約3.5m、南北約1.0



第15図 壁穴住居跡SB08・SB09平面図

器・石器類がみつかった。量的には整理箱につめて8箱程度である。土器には、壺・甕・高杯・器台などがある。土器は後期に属し、大半は在地産のものと考えられるが、近江系、伊勢湾系、生駒西麓産などの搬入品もみられる。丘陵上でみつかったものであり、土器の遺存状況はあまり良くないが、様相が明確でない南山城の弥生土器を知るうえでのひとつの資料になろう。

SB08 (1~29) 1~4は壺であるが、2は器台の口縁部の可能性もある。1・2と



第16図 トレンチ全景（拡張前） （南から）

も口縁端部を下方へ大きく拡張させている。1は口縁端部に3条の凹線が巡る。3は近江系のもので、口縁部外面下半の屈曲部に刻み目を巡らす。4は頭部に突帯を巡らす。5～12は壺である。5は外面にススが付着し、体部内面には炭化物の付着がみられる。6は外面に粗いハケメを施し、内面はナデて仕上げる。これだけが淡桃褐色を呈し、しっかりした焼成である。7は近江系のもので、口縁部外面に刺突紋、肩部に櫛描直線紋を巡らす。9は内外面ともナデ仕上げされる。11は内面調整は不明であるが、体部外面はたて方向のハケメがみられる。13～16は壺の底部であるが、13のように稜のあるしっかりした平底や15のように外側を丸くした平底がある。17・18は壺の底部である。19～23は高杯である。20は全面にヘラミガキが施されるが、杯部外面のものは細かい。21は脚部上部に6条の擬凹線が巡る。23は杯部外面中央に垂下ぎみに突帯を巡らせ、突帯下端部及び外面に刻み目を施す。刻み目の上部に8条の擬凹線を巡らす。杯部外面・脚部外面にはていねいなヘラミガキが施される。24・25は脚部である。26～29は器台である。26は口縁端部に6条の擬凹線を、内面には波状紋を巡らす。外面はたて方向のヘラミガキ、受部内面は上半にたて方向、下半に横方向のていねいなヘラミガキをそれぞれ施す。筒部内面には横方向のヘ



第17図 調査地全景（北から）



第18図 S B 08北東部土器集中部分（北から）

ラケズリがみられ、上下2孔1対の穿孔が6ヶ所に施される。27は口縁端部に3条の擬凹線が巡り、受部内面は横方向の外面はたて方向のていねいなヘラミガキが施される。28は口縁端部に竹管紋が巡り、受部内外面ともたて方向のていねいなヘラミガキが施される。29は厚手のもので、筒部外面にたて方向のハケメが施

されるほか横ナデで仕上げられる。

S X01 (30~32) 方形周溝墓の周溝部からみつかったもので、すべて壺である。30は近江系、31は生駒西麓産のものである。32は口縁部外面に2個1対とみられる棒状の貼り



第19図 トレンチ北半部（南から）

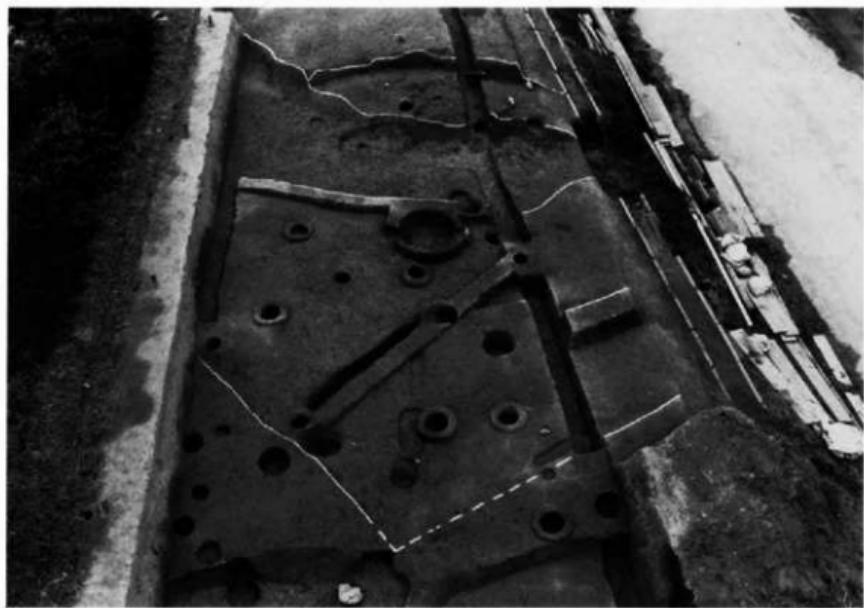
付けがたて方向に施される。頸部には2条以上の沈線が巡る。胎土も他の土器と異なり伊勢湾地方からの搬入品と考えられる。

S K 06 (33~38) すべて壺とみられる。33はつまみ上げた口縁端部内面に波状紋が巡る。34は口縁端部に円形浮紋が貼り付く。35は生駒西麓産のもので、下方に拡張させた口縁端部には3条の凹線と円形浮紋が巡る。36は口縁端部を下方に大きく拡張させる。表面摩滅のため調整不明である。37・38は底部である。

その他 (39~42) 39はS B 08下層のピットからみつかった近江系の壺である。口縁部外面下半に刻み目をもつ。40はS X 03からみつかった甕である。41は12区のピットからみつかった器台である。口縁端部に3条の凹線と竹管紋を施した円形浮紋が巡る。42はS B 09上の包含層からみつかった脚部である。非常に厚手のもので透かし孔をもつ。

松村茂氏採集 (43~45) 43は甕で細かいハケメがみられる。特に体部外面のハケメの頂部は波状紋風につながる。44は高杯で脚上部に5条、その下に7条の擬凹線が巡る。杯部内面にはヘラミガキがみられる。45は小型の椀であろう。内面にヘラナデがみられる。

木田清次氏採集 (46~56) 46~49は壺である。46は口縁端部をわずかに下方へ拡張さ



第20図 SB09・SB08(北から)

せる。47は口縁端部を平坦に仕上げる。48は近江系のもので、頸部上半は横方向のハケメ、下半はたて方向のハケメがみえる。49は厚手のものである。50は大型の甕である。51は器台で、口縁端部には3条の凹線が巡り、3ヶ1組の円形浮紋が数ヶ所施される。52は高杯である。脚部上部に3条、下半部に9条の擬凹線が巡る。53は鉢である。54～56は壺の底部である。55・56の底部内面にはクモの巣状のハケメが施される。

2. 石器（第26図）

今回みつかった石器には、石鏡8点、石錐1点、スクレイバー2点以上、扁平片刃石斧1点、砥石1点がある。この他にサヌカイトの剥片・破片、石斧の原材の可能性のある粘板岩片などがあり、剥片のなかには石器になるものも含まれているとみられる。これらの石器は、前述の弥生土器とともにみつかったものであり、後期に属するものと考えているが、石鏡のなかの凹基式のなかには縄紋時代に遡るものがある可能性も否定できない。

石鏡（1～8） すべてサヌカイト製。平基式（1・2）、凹基式（3～8）の2種類がある。平基式の1は両面に調整が、2は周縁のみに調整がみられる。凹基式の4は大型で抉りも深い。5は両面に調整がみられる。6は幅が狭いもので周縁のみ調整される。



第21図 SB08・SK06（東から）

1はSD09の上の包含層、2はSX01南溝、3・4・6・7はSB08、5はSK06、8はSB09北側のピットからそれぞれみつかった。

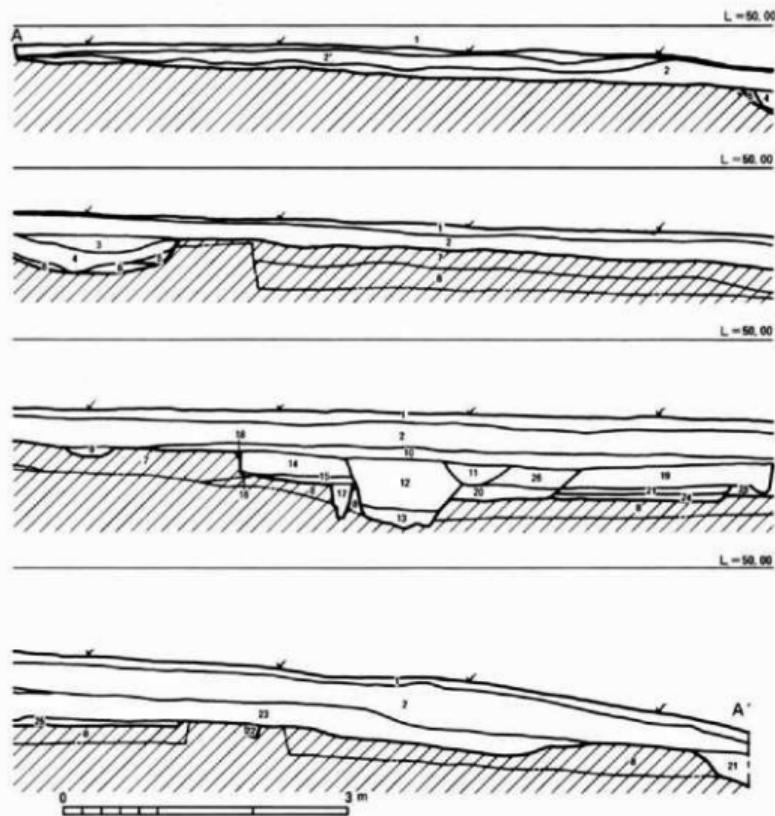
石錐（9） SB08からみつかったサヌカイト製のもの。頭部と錐部にわかれるもので錐部の先端部は欠失している。頭部周縁の両面に調整が施され、石錐の未製品の可能性もある。

スクレイバー（10・11） ともにSX03からみつかったサヌカイト製のもの。10は薄い剥片の片面側縁を調整し刃部を作るもの。11は厚い剥片の側縁を調整し刃部を作るもの。

扁平片刃石斧（12） 粘板岩製。基部は欠失している。器表はていねいに研磨調整され平滑に仕上げられている。刃部には使用による剥離がみられる。おそらくSB08からのものとみられる。

5 まとめ

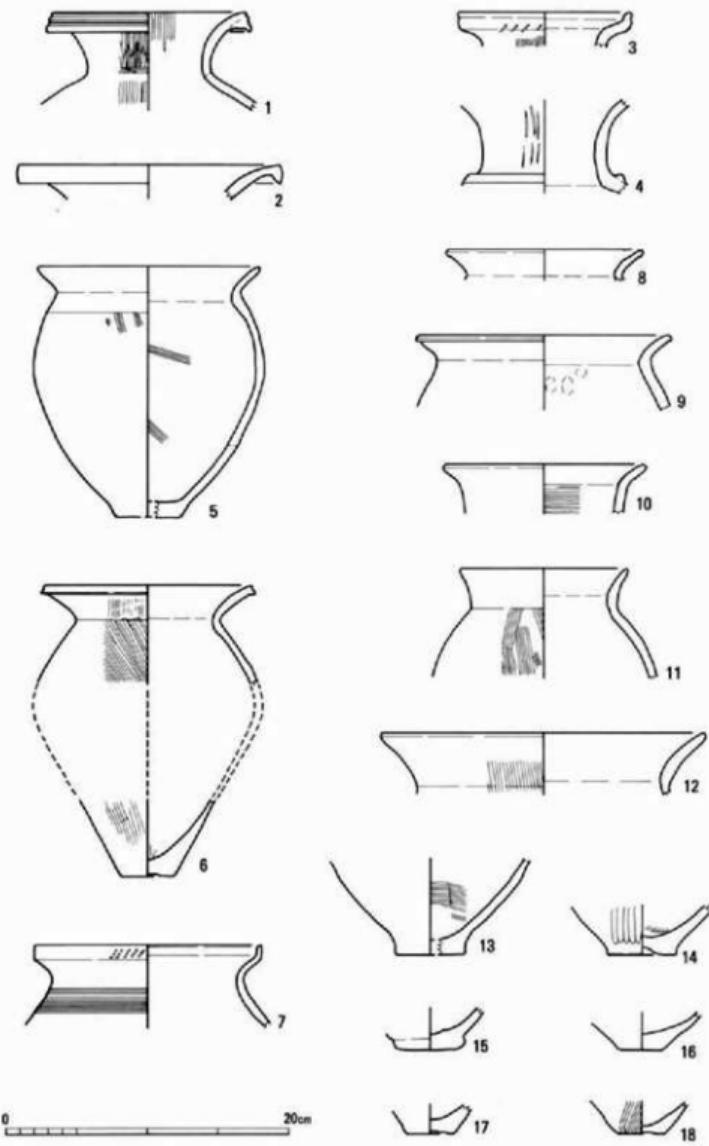
今回の調査は、南山城唯一の独立丘陵である飯岡の南東部にあった小丘陵のゆるやかな北斜面で実施した小規模の調査であった。



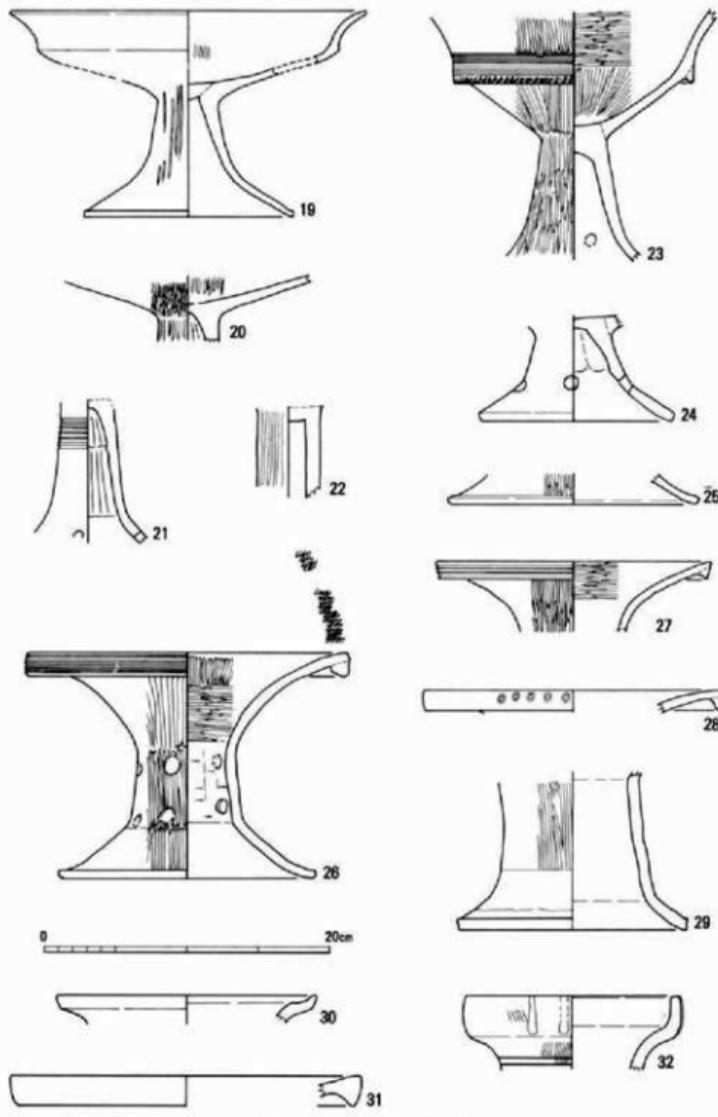
第22図 トレンチ西壁土層断面図

調査の結果はこれまで述べてきたように、弥生時代後期の竪穴住居跡、方形周溝墓、土坑など多くの遺物類とともにみつかったことである。

竪穴住居跡は、今回調査地の東50m地点で円形のものが1棟、西180m（田辺病院内）地点で方形のものが1棟あり、あわせて円形2棟、方形1棟、多角形（？）1棟の4棟が確認されたことになる。時期はいずれも弥生時代後期である。一般的に住居跡は平面形が円形のものから方形のものへ変遷するとされている。この遺跡の西約2kmにあり、現在同



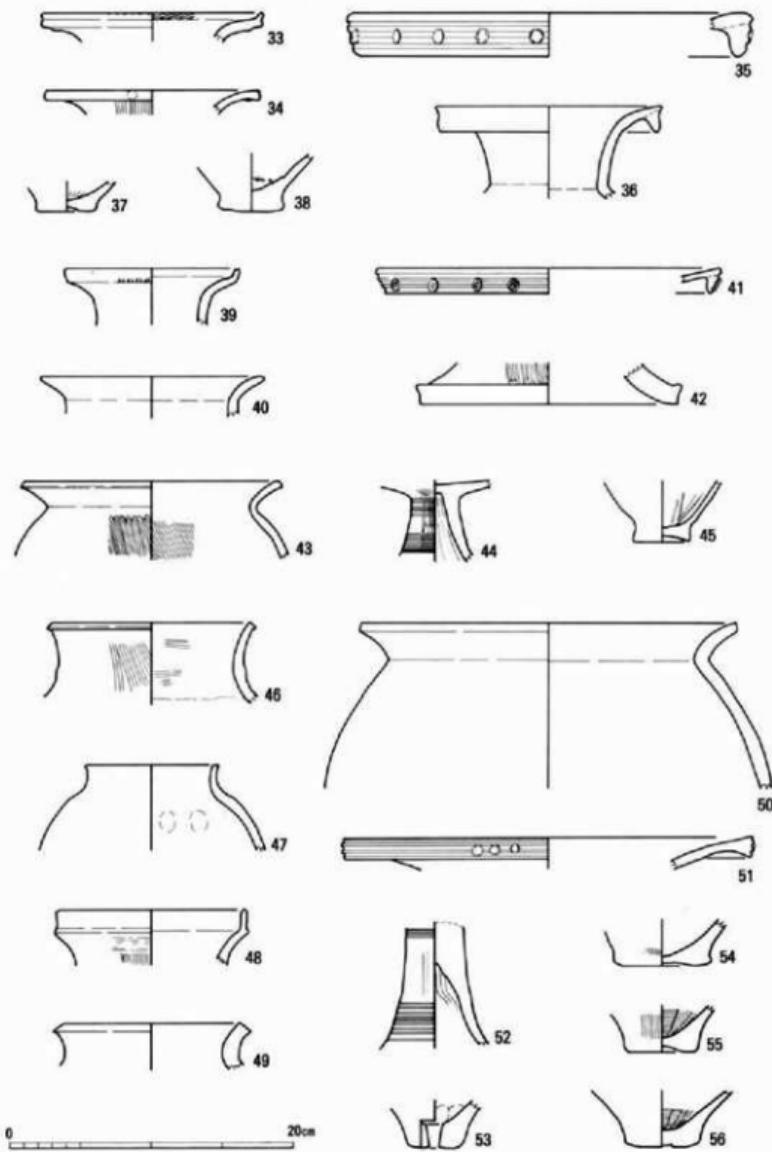
第23図 弥生土器実測図(1)
SB08: 1~18 壺(1~4・13~16)、甌(5~12・17~18)



第24図 弥生土器実測図(2)

S B08 : 19~29 高杯(19~23)、脚部(24・25)、器台(26~29)

S X01 : 30~32 盆(30~32)



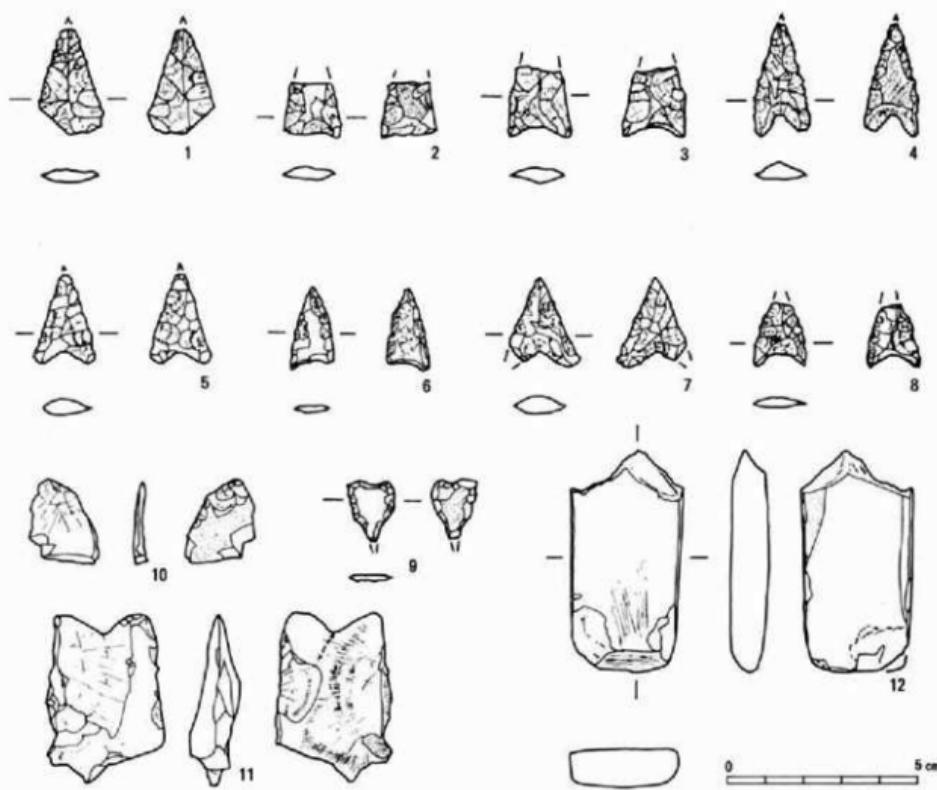
第25図 弥生土器実測図(3)

S-K06: 33~38 盆 (33~38)

その他: 39~42 壺 (39・S-B08下刷ビット)、壺 (40・SX03)、器台 (41・12区ビット)、脚部 (42・包含層)

松村茂氏採集: 43~45 壺 (43)、高杯 (44)、碗 (45)

木田清次氏採集: 46~56 壺 (46~49・54~56)、壺 (50)、器台 (51)、高杯 (52)、碗 (53)



第26図 石器実測図

石頭：1～8 石錐：9 スクレイパー：10, 11 篦平片刃石斧：12

志社校地内に保存されている田辺天神山遺跡も高地性集落として著名であるが、そこでは20数棟の弥生時代後期の堅穴住居跡がみつかり、おおむね不整円形→円形→方形へと変遷することが確認されている。このことが、飯岡遺跡にもあてはまるるとすると、集落が東から西へ移動したことも考えられるが、棟数が少ないため明らかでない。また、今回は円形の下層で多角形のものがみつかったわけで、このことがこの地点での特異性を示すものなのか、周辺の調査を待ちたい。

方形周溝墓については、丘陵頂部にある薬師山古墳の北西側で2基後期前半に属するものがみつかっており、今回のものとあわせて3基になる。これまでには、飯岡丘陵でもより高所に墓域が営まれ、南斜面側の比較的平坦な部分に居住域を求めていたものと考えられ

ていたが、今回のように南斜面側でも方形周溝墓がみつかり、しかも竪穴住居跡と重複していたことは大きな発見である。仮に集落が東から西へ移動したとすると、以前の集落のあった場所が墓地になったものとも考えられる。また、同一地点が住居（多角形）→住居（円形）→墓と変遷していくことを重視するならば、この場所が集落にとって一種の聖域であった可能性もある。

遺物では、SB08埋土北東側を中心に多くの土器がみつかった。これらの土器類のうち甕は体部内外面とも大半がハケメないしナデで仕上げられ、タタキメのものはごく少ない。壺は口縁端部に粘土を足し下方に大きく拡張されている。これらのことから、この土器類は後期でも前半に位置付けられよう。また、土器には近江系、伊勢湾系、生駒西麓産のものが含まれている。このことは、当時の交流の証しとされるものであるが、このなかではやはり近江系のものが多くみられ、山城地域の特徴のひとつとされている。

また、石器は石鎚が8点みつかったことは注意されよう。他に石錐、スクレイバー、石斧、砥石などがみつかったが、石包丁・鎌などの農耕具はみつかっていない。

飯岡遺跡については、丘陵上に立地することから高地性集落とされているが、みつかった石鎚を戦闘用具とみなすならば、防御的性格を遺跡に与えることもできよう。

以上のように考えられるが、現在までの周辺の調査状況をみると、今回の調査地付近が集落の中心部であったことがうかがわれるようである。丘陵の南側には遺構の広がりが認められるが、北側や東側については明らかでない。時期的にも後期の前半に集中しており、集落の存続時期がこの時期だけなのか前後に時間幅を持つものかなども明確でない。いずれにせよ、古墳時代には連綿と古墳が築かれ続けた独立丘陵の飯岡は、古墳のみでなく、その前代の弥生時代にかなり土地利用が行われ、集落が営まれていたことが明らかになってきたといえよう。今後の調査に期待したい。

参考文献

- 梅原末治「山城飯岡トヅカ古墳」「山城飯岡車塚古墳」(『日本古文化研究所報告』9 日本古文化研究所 昭和13年 1938)
- 平良泰久・下村晴文編 「南山城の前方後円墳」龍谷大学文学部考古学資料室 昭和47年 1972
- 森浩一編 「田辺天神山弥生遺跡」(『同志社大学文学部考古学調査記録』第5号 同志社大学文学部考古学研究室 昭和51年 1976)
- 同志社大学校地学術調査委員会編 「飯岡横穴発掘調査報告」「付載 飯岡東原古墳の発掘調査」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 昭和55年 1980)
- 『京都府弥生土器集成』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 平成元年 1989

平成5年3月30日印刷
平成5年3月31日発行

飯岡遺跡第4次発掘調査概報

(田辺町埋蔵文化財調査報告書第16集)

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字田辺80番地

電話 07746-2-9550

印 刷 明 新 印 刷 株 式 会 社

〒630 奈良市南京終町3丁目464番地
電話 0742-63-0661